

加賀の文化と伝統工芸

しま 嶋 ざき 崎

すすむ 丞*

金沢という町は、今日京都と並んで日本における伝統文化そのものが生きている町として広く知られているために、多くの観光客の皆さんが、日本人の心のふるさととして金沢を訪れられるのだと思います。事実金沢の町を歩いてみますと、10軒に1軒くらいは九谷焼を売る店とか、加賀友禅を展示している店があるくらい、金沢の町には伝統文化と何らかのかかわりあいのあるお店がずいぶんあることに気づかれたと思います。つまり金沢の町は今日伝統文化が生きている町だということがお分かりいただけたと思います。しかしこうした意味で金沢の町へ来てみると、金沢の町で見るところのあるのは「兼六園」と「忍者寺」くらいであって、寺町通りということで寺町へ行ってみても、京都のように建築物や庭園を鑑賞するような寺院は1軒もなく、京都と並んで金沢というようなキャッチフレーズで金沢へやってきても、本当に見る所のない町である、というようなお話をよく耳にします。しかしこのことは最初に申しあげたように、金沢の町は見る観光の町というよりも、現在の金沢の町に生きている伝統文化そのものを味わう町であって、いふならば点の観光というよりも広がりのある面の生活を味わう観光の町、伝統文化の町であるということを知る必要があると思われまふ。したがって2～3泊もして、特に冬場1～2月ごろに日本海の荒波でとれる魚を食卓にして、雪見酒で、友禅の着物を着た接待さんを側にして、伝統工芸を器に使いながら生活を味わうそんな町であると思われまふ。同じ古い伝統的な町であっても、例えば山口県の萩の町や木曾路の妻籠の町を思い出していただければよく分かりますが、こんなことを申しあげてはしかられるかも知れませんが、これらの町は、明治なり、江戸なりの時代でストップしている町であって、現在の町ではない。しかし金沢の町をみてみると、金沢は伝統的なものが、今日の現在の生活の中に生かされて、生きている町であり、古いものあり、新しいものあり、それらが一体となって見事に調和している町であって、過去のあるものを売りものにするような町ではないところが、金沢の町の今日的な「よさ」であり、そして「ほこり」であるだろうと考えています。

さてこうした「伝統文化」の「よさ」ともいうべきものを見事に生活の中に生かしている金沢の町の雰囲気ともいうべきものは、どうしてでき上がったかということが、本日私に与えられたテーマになってくるのですが、金沢文化を考えてみる場合には、どうしても金沢城下をつくりあ

げた藩主前田家について考えてみなければならなくなって参ります。

前田家の初代藩主利家は、今日NHKで放送されております日曜日の大型ドラマ「女太閤記」をご覧になってお分かりのとおり、桃山時代の天下統一の武将豊臣秀吉の筆頭家老であります。秀吉が慶長3年8月に没して、そのあと6ヶ月後慶長4年の春に利家があとを追うように没し、天下の支配は関ヶ原の戦を経て、徳川家康に移り、近世江戸時代の幕藩体制が完成したことはよく御存知のとおりでございます。

こうした幕藩体制の中で、徳川家が最も気にしたのは秀吉の片腕であった前田家の処遇と、権力を骨抜きにしてしまったもののやはり天皇に対する配慮であったと思われまふ。封建時代にあつては、こうした人々を封建体制の組織の中へ組み入れる最もな手段は、政治的な縁組であります。徳川政権はそうした意味で、前田家を封じ込むために、徳川家康と前田家2代藩主利長との間に話合いが行われ、前田家の3代藩主利常に、2代將軍秀忠の娘、「珠子」を縁づかせることになったといわれています。珠子が金沢城へ入城したのは三歳で、時に利常は九歳であった。一方当時の天皇は後水尾天皇で、後水尾天皇は文化的識見の極めてすぐれた天皇で、江戸初期京都の寛永文化のリーダーシップをとった方で、この京都寛永文化の中から、光悦や宗達が生まれ、仁清のやきものが生まれ、また桂離宮や修学院離宮が作庭されたことを考えてみても、後水尾天皇の文化運動、精神活動はいかにすぐれたものであるかを理解していただけたらと思われまふ。こうした天皇の運動は徳川政権にとっては、やはり非常に気になる存在であり、したがって後水尾天皇に対しても政治的圧迫を加えるために、秀忠の娘「和子」を縁づかせて封建体制の中へ組み入れていたのであります。つまりこのことによって理解されまふように、利常の妻の珠子と後水尾天皇の皇后和子内親王とは姉妹の関係であり、利常と後水尾天皇とは義兄弟ということになります。この姉妹の間に3代將軍家光が存在するわけであります。加賀文化を考える場合、この人間関係が大変重要な意義を有しているのです、まずこのようなお話を申しあげた次第であります。

加賀藩3代藩主前田利常は歴代藩主中、文化的識見の最も豊かな大名でありました。実は2代の前田利長と利常は腹違いの兄弟で、父は初代藩主前田利家であった。利常は利長から封を譲り受けると、自分の父利家は、かつて天下を統一した秀吉の片腕であり、あわよくば天下統一を行う

*石川県美術館 副館長

特別講演

実力を有していた人物であったことを常に思っていたらしく、どうかして徳川家を支配するようなことが実行できないかと考えていたようです。封建体制下、とくに縁組支配のもとにあっては致し方なく、これを行うには文化事業以外にはないと考えたらしく、文化事業の面では徳川政権をものぐスケールの大きな事業を各所で行っています。とくに政治縁組でめとった珠子が元和8年に没すると、関を切ったように文化事業が展開していったといわれています。

日本全体の立場からみてみても、前田家はあたかも徳川政権の文化事業を肩替りしているのではないかと思うような事業を各所で行っており、それはむしろ徳川政権に対抗するような金の使い方をしており、我こそは文化面においては徳川政権の上に立ち、日本一の大大名であることを天下に号令するような態度すら感じさせるものがあります。例えば、自分の兄利長のために今日の自分の地位があるとして利長を丁重に弔らい、越中の国高岡に端竜寺を建立していますが、この寺院の基範としたのは、日本の禅宗の根源である中国宋時代浙江省径山の万寿寺の伽藍配置そのものを写し、寛永年代における寺院建築としては日本一のもの建設している事実をみてもそうした利常の姿勢を感じとることができるのであります。また文物の収集にしても、他のいかなる大名のまねのできない価格を表示して手に入れたり、海外からの舶来品を長崎の港で船ごと買い込むなど、その手段は尋常でなかったといわれています。こうした利常の態度は次第に全国に知れわたり、多くの芸術家や文化人は金沢の前田家へ行けば何とか面倒がみもらえるだろうと江戸の前期から中期にかけて金沢に多く集まり、前田家自身もこうした人々を雇い入れ、美術工芸調度品を製作させ、また多くの研究活動を助成するなどして、金沢はあたかも寛永の後水尾天皇の公家文化サロンの如く、前田家を中心とする武家文化サロン社会が形成されていったのであります。

とくに集められている文化財は、今日幸いにも東京駒場の前田育徳会に保存管理されているが、それらのすぐれた文化財をみてみると、平安王朝時代の優美な古典文学の世界に統一されていることが分かりますが、こうした識見は義理の弟である後水尾天皇のアドバイスによったのではないかと思います。前田育徳会には利常と後水尾天皇との親交を示す消息が数多く残っており、それを見てもこうした事情は裏づけされますが、また利常の茶道師範でもあった小堀遠州も、利常の美意識や文化的精神形成に大いに役割を果たしているように思われます。遠州は京都作事奉行として後水尾天皇とも深い関係があり、こうした2人によって王朝のすぐれた美意識が利常に感化していったと思われます。とくに利常の文物、なかでも茶の湯の道具の収集に当たっては、遠州の極書になるものが相当数存在し、また遠州は王朝文化の定家様の書をよくしているが、利常自身も定家や遠州流の書をよくするところをみても、利常の求

めた世界は、王朝の美意識であったことが十分と理解されます。つまり利常の対徳川を意識した京都からすぐれた文化を移入して、対京都を意識した日本一の文化育成を金沢で実現してみようというような姿勢を利常のいろんな事業のなかにみることができ、これが今日の金沢の伝統文化スタートの第一歩になっているといえることができるように思われます。

利常の次の4代藩主は早世し、藩政は実質的には次の5代藩主に移りますが、5代藩主綱紀も非常に利常によく似た文化施策をいろいろと実行した大名として広く知られています。利常は王朝の文物の収集や美術工芸の育成に力を注いだ大名であるが、綱紀は今日的な意味での博物館美術館的な文化事業を推進した大名で、経済的価値の文物より、資料的なウエイトのある文物の収集や美術工芸育成に力を注いでいます。広く世に知られる工芸の標本見本資料を集大成した「百工比照」や、書物文献の国内はもとより中国にまで手をのびした「尊経閣文庫」の存在はこうした面を見事に表しており、新井白石はこうした状況をみて「加賀は天下の書府なり」という有名なことばを残しています。

加賀文化の基礎はこうした利常から綱紀の代に至る江戸時代前～中期の約80年間、加賀藩の経済的に最も豊かな時代にはぐくまれた文化であり、その根源は、京都の優美な雅を基礎におく王朝文化であるが、しかしその文化は全く京都文化そのものではなく、前田家という武家的な意識でもってそしゃくされた北陸の風土の文化であります。例えば町家の造りをみてみると、そのたたずまいは極めて京都市的であり、前面に木の格子を配する建築意匠の構成美などはその典型的な例であります。しかし室内の壁の色は京都よりもややどぎつい濃さ暗さをもっています。同じ友禅染の色調でも京都は明るく洗練された中間色の色調であります。加賀友禅はあでやかなほな色調を有するという具合に、独特の特質をもつように変化しています。

金沢を中心とする石川県における伝統工芸は、すでに京都ではなくなっているものが石川県には存在し、その数においては京都をしのいでいます。しかもそれら伝統工芸は、何らかの意味において江戸時代には前田家の文化施策とのかかわりあいの中において発展展開しているものが多く、そうした意味で、すでに述べたように前田家の江戸時代前半における文化施策は、今日の金沢を中心とする石川県の伝統文化を形成するには欠くことのできぬ大きな役割を果たしていることが十分と理解されます。

そしてそれらの伝統文化が、今日の石川県民の生活の中に見事に生き続けているのが、最初に述べたように何といてもほかにみられないすぐれた「よさ」であり、この「よさ」を大事にし伝統文化を守って行くことが、石川県民に課せられた責務であろうと考えられます。こうした意味で、今日の金沢の現状をよくみてお帰り賜われれば幸いです。

(原稿受理, 1981.8.10)